私の歩みから

宮本顕治



宮本顕治

私の歩みから



私の歩みから

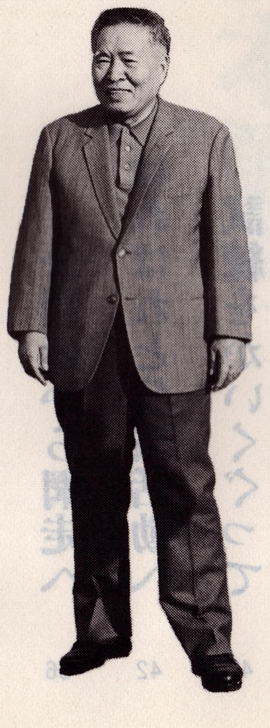
宮本顕治



表紙写真　「赤旗」写真部
扉カット　川上尉平

＊目次

この半世紀、日本の革命運動とともにあゆみつづけた日本共産党の宮本顕治委員長。その人生は、思いがけないできごとや苦難の連続でした。そのときなにを思い、どうのりこえてきたか、興味深い初公開のエピソードもまじえて語ってもらいました。



少年の日々

新聞記者になりたいと答えた私は、〝文武両道〟をめざす少年だった……

母が見えないとさびしくて

——まず、生い立ちから……。

私が生まれたのは、一九〇八年（明治四十一年）十月で、ところは山口県熊毛郡光井村（現在の光市光井）です。三人兄弟の長男でした。私の家は、瀬戸内海に面した小さな村にあって、菜種をしぼってとった油や雑穀、肥料などの商売をしていました。

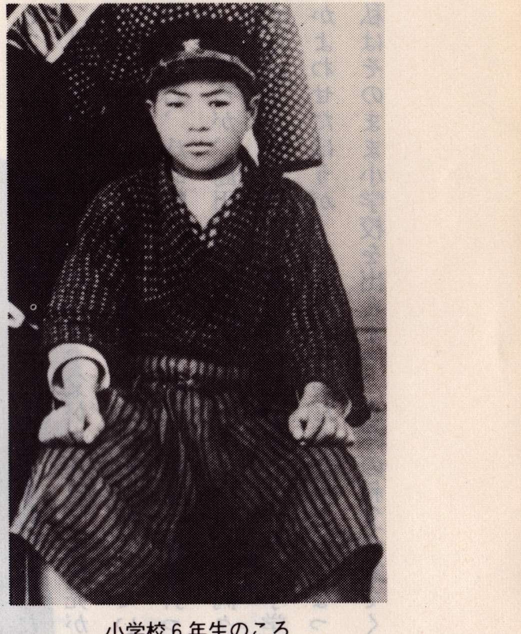
父は、近所でも正直もので短気ものという評判をとっていました。なにしろ軍隊に一兵卒でいって特務曹長になり、勲章をもらったぐらい勇敢な男です。こどもをかわいがるんですが、商売がうまくいかないと、大酒を飲んで暴れることがありました。私たち兄弟は父によく酒を買いに行かされたものです。

母は、私にとっては、慈母という感じの人で、幼いころはちょっとでも母の姿がみえないとさびしくてさがして歩いたものです。

私が小学校にはいったころ、父が光井村では商売がうまくいかないといいだして、自分の弟が分家して商売をやっていた島田村、光井から七、八㌔離れたところへ家中引っ越しました。

ところが、島田村の小学校は、一、二年生が合同クラスというような小さな学校で、親たちのあいだで、光井の小学校にそのままかよわせたほうが、この子のためだということになったんですね。

私はそのまま小学校を出るまで、光井の叔父の家でくらしました。



小学校6年生のころ

光井の文学好きの友だちと

その叔父というのが、またおもしろい人で、酒は飲む、派手好き、政治好きときていて商売は赤字つづきで、借金で首がまわらないというのに、悠然と碁を打っているというような人物でした。

叔父は、私をとてもかわいがってくれて、村の顔役をまねいた酒の席に私をよんで「君が代」を歌わせたりするんです。

私はこれがとてもいやだったですね。私は、小学校ではずっと級長でしたが、叔父はそれが自慢で、来客によく吹聴するので、叔母が「あまり自慢しないで」とたしなめたくらいでしたが、私もそのときいつも叔父が「この子はませていて」とつけくわえるのが大きらいでした。

一事が万事こういう具合ですから、叔父の家にいても、なにかよその家の世話になっているという感じではなくて、あるとき遠足やなんかで両親の住んでいる家の裏をとおっていながら、帰りに顔もみせなかったと、母がなげいたこともありました。

徳山中学にかようようになってからは、列車通学ですから、便利のいい父の家に移ったわけですが、休みになると、すぐ光井村の叔

父の家に出かけていました。それというのも、光井には文学好きの友だちがいましてね、芥川龍之介、久米正雄、山本有三の作品やトルストイやチェホフなどを読んで感想を語り合ったり、当時の文芸雑誌で知った文壇のうわさ話をしたり、夏は近くの海で泳いだり、とにかく楽しいんですね。そういう思い出があるせいか、いまでも、もちろんいまは姿かたちはすっかりかわっていますが、光井は、非常になつかしいところです。当時の海岸は、文字通り白砂青松で、海も澄んでいました。

〝無冠の帝王〟にあこがれる

──小さいときは、なにになりたいと思っていましたか。

私は学校の勉強もやるが、相撲、水泳や走りっこも得意といった、いわゆる〝文武両道〟をめざした少年でしてね、文学が好きだからといって、将来、文士になれるものとも夢にも思わなかった。ただ、中学へ上がる前に、親たちが私を陸軍士官学校にやろうかという話があったんですよ。士官学校は金がかかりませんからね。金のない家にはちょうどいいんです。しかし、私はなぜか士官学校というのが好かなくてね。

あるとき隣村の室積に乃木大将かなにかの「活動写真」を見にいって、自転車に乗せられての帰りに、叔父から「なにになりたいか」ときかれました。「新聞記者」と答えたら、叔父は、自分がうんとひいきにしているおいのことですから、「総理大臣」とか「陸軍大将」とかいわせてみたかったらしく、「なんだ、新聞記者か」なんて、不きげんになったことがあります。あのころ、新聞を読むと、記者は筆一本だが、「無冠の帝王」なんて書いてあったし、文筆が立つということは、尊敬すべきことでした。

習字の半紙をあげた少女……

——初恋は？

あれがそうだとすると、小学校二、三年のころですね。私と同じ部落のずっと奥にあった目医者の娘なんです。学校の帰りに、ひとかたまりの少女のなかのその子にだけ紙ばさみから習字用の半紙をやったことがあるんですよ。たったそれだけのことでしたが、あとあとまで級友たちに「半紙、半紙」とひやかされましてね（笑い）。その娘が、たしか私が高校生のころ、嫁にいったという話をきいたとき、ふっと心が動きました。そういえば、あの娘のことでひやかされたことがあったなとなつかしく思い出した記憶がありますから、やはり心のどこかでその娘を意識していたんでしょうね。それだけのことですが……。

——徳山中学時代は？

中学へ進んだとき、柔道部へはいりましたが、文学書は家でふろたきしながらもよく読みました。木原通雄といって、のちに報知新聞の有名な新聞記者になった男ですが、この木原などと非常に仲がよくて、『叫び』という回覧雑誌をつくったり、お互いの家に泊まり合って文学論をかわしたりしました。

ところが、ちょうどそのころ、父の商売がいよいようまくいかなくなって、家具に差し押えの紙がベタベタはられ、家の前でその家具の競売がやられるということになりました。

短気な父は、苦しまぎれに大酒を飲んでわめきちらし、母をなぐりました。いなかのことですから、そういうさわぎはつつぬけです。私ははずかしくて、翌朝は学校へいくのに裏通りをとおってこっそり駅へいったりしましたが、つらかったですね。

「なぜ世のなかには金持ちと貧乏人がいるのか」「父があれだけせ

っせと働いているのに、どうして商売はうまくいかないのか」

クロポトキンの『青年に訴える』や石川啄木の詩歌などを読みふけり、だんだん新聞紙上の社会問題にも関心を深めていったんです。

県の柔道大会で〝金メダル〟

親たちにすれば、こういう環境のなかにこどもをおいておくのはかわいそうだというので、私を母方の親類の家にあずけました。私は一年間ぐらいこんどはそこから中学にかよいました。

中学四年のとき、腰に手ぬぐいをぶらさげた松山高校柔道部の平田というスカウトマンがわが中学にやってきました。徳山中学柔道部の主将といっしょにどういうわけか当時一級だった私にもスカウトの声がかかった。もちろん、むこうにすれば私が〝本命〟じゃなかったわけですが、いざ受験してみると、主将が落ちて私だけがうかるという結果になりました。

その入学試験の作文に「新聞記者」という題がでました。あとで柔道部の部長の教授から聞いたところでは、私の作文が模範答案だったそうです。

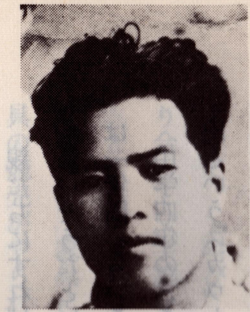
松山高校の柔道部は、はいってみると強い連中がいっぱいいて、練習もはげしくてね。ちょうど私自身のなかに本を読みたいという欲求がものすごく強かったこともあって、多くの時間を柔道の練習に使ってしまうのが惜しいような気がしきりにしはじめたんです。

そのうち、からだをこわして、それでとうとう退部したのですが、スカウトされてきた部員としては、期待にこたえることができなかったわけです。

ただひとつ、柔道部の「名誉」に貢献したのは、在部中、県の武徳会の少年組（十八歳以下）の大会に出場して優勝し、金メダルをもらったことでした。

知的な目ざめ

漱石の『坊ちゃん』の地で知的な目ざめに、私の青春は波立った


旧制松山高校在学のころ

――松山高校時代は、だいぶ活発に……

思想的なめざめに波立った日々が、このころの私の生活でした。柔道部をやめて、時間的にも自由になり、私は弁論部にはいりました。私はプロレタリア文学運動に共感を感じ、『文芸戦線』なども熱心に読み、葉山嘉樹の『セメント樽の中の手紙』など初期のプロレタリア文学の作品も愛読しました。

理論書として、マルクス主義の文献や、外国のプロレタリア芸術理論書も読みあさりました。

アルバイトもクビになって

私は当時アルバイトをしていました。それも市長の息子を教えていたのですが、さいわい金はなくとも、当時の高等学校の生徒というのは信用があって、本屋が付けで売ってくれたので、つぎつぎと翻訳されて出てくる社会科学の文献を手に入れることができたのです。

市長の息子を教えることになったのは、学校に申しこまれていたものが、学資の乏しい私にまわってきたと思います。

しかし、のちに私が社会科学研究会などを組織して、「アカ」い学生だとわかるとまもなく、市長のところのお手伝いさんが、その月分の月謝と、「もうこれきり」という口上をもって下宿をたずねてきましてね。クビになりました。

女学校の前で同人誌売り……

松高では私の入学した翌年、一九二六年（大正十五年）の秋に「自由の校風を守ろう」と、官僚的な校長の排斥ストライキがおこります。私は、二年生のストライキ委員の一人だったんですが、全生徒が立ちあがって、先輩も東大や京大からかけつけ、父兄会なんかも生徒を応援するというなかで半月後一人の犠牲者もなく勝利し、自由と自治を守ることができました。

こうした環境のなかで、私の読書や思想生活をもとめる気持ちはますます触発されるんですね。中学時代の同窓生で早稲田大学にはいっていた友人や同級生らと同人雑誌『白堊紀』を出しはじめました。

私はこの雑誌に戯曲『狂人達』や小説『三等病室にて』、芥川龍之介についての感想などを発表したのですが、発行資金をつくるのがたいへんで、雑誌ができると学友にたのんで買ってもらい、本屋においてもらい、また女学校の校門の前で売ったこともあります。しかし、資金がつづかず、とうとう五号で終刊になってしまいました。

この間、改造社の講演会で松山にきた有名なロシア文学者で、早稲田大学文学部長もやったことのある片上伸氏を宿舎に『白堊紀』をもってたずねると、私の作品を力作だとほめてくれて、ぜひ東京の大学に進むようにと、はげましてくれました。

夏休みに郷里の光井村の小学校で、中学の同窓の木原通雄らといっしょに芝居をやったのもこのころでした。出しものは、武者小路実篤の『だるま』で、私はただなぐられながら、だまってすわっていればいいというダルマの役をやりましたが、村の人たちが講堂にあふれ、盛況でした。

研究会で合宿と共同書庫

――松高時代、女性にもてたという話をききますが……。

それはなにかのまちがいですね（笑い）。ただ高等学校の生徒というと、娘をもつたいていの親が悪い気はしないという町のふん囲気がありましたから、松高生ということで全体が少しちやほやされる気味がありました。それと下宿の窓から柿の木ごしにみえる丘の上のミッションスクールの女学生たちがやんちゃで、私が窓辺の机にむかうと、教室の窓から手をふって私をからかったことを覚えていますが……。

私自身の頭のなかには、社会科学のことでいっぱいで、研究会をつくるなどして、検閲で伏字だらけで出版されていたマルクスやエンゲルス、レーニンなどの本を熱心に読みあっていました。

まもなくその仲間と一軒の家を借りて、「無産者新聞」支局の看板を出し共同の書庫をつくり、自炊生活をはじめたわけですが、さきごろなくなった新日鉄社長の田坂輝敬も私の一期下でこの研究会のメンバーの一人でした。またこの会にはいってはいませんでしたが、のちに京都大学在学中、共産党にはいり、獄中で死んだ佐藤真民という、別府の旅館の息子も一級下にいました。

帰省すると母が心いためて

――「アカ」ということで両親は心配されませんでしたか。

学校には、卒業に必要な日数ギリギリの出席しかしないで、同人雑誌や社研の活動ばかりやっていたわけですから、当然成績もかんばしくなく、父は、せっかくできるこどもと思って高校にやったのに、どうしたのだろう、と私にないしょで学校まで聞きにきたりしていました。



山口県島田の実家

私がアカといわれていることをはっきり知ったのは、村の駐在所の巡査が家の近所にきて、私のことをいろいろさぐったりしてからでした。夏休みに帰省すると、母はひどくそのことで心を痛めていました。

破産すれすれの商売をなんとかやりくりしながら、私の「出世」にのぞみを託していた両親です。その気持ちを思うとつらく重い気持ちになりましたね。しかし、私に世のなかの矛盾を教え、社会への目をひらかせたのは、両親の苦しい生活だったわけですから、私はそうした自分の気持ちや、家のおかれている境遇、社会のしくみの問題との関係などを母に話しました。

母は私の話にじっと耳をかたむけていましたが「社会がおまえのいうように、かならず変わるものなら、なにもおまえが犠牲になるようなことをしなくてもいいではないか」というのです。

「アカ」といえば、私のかよった小学校のすぐそばに、日本共産党の創立当初の党員の一人となった市川正一の生家があって、村の

人たちは、市川のことを「村からとんでもないものがでそうだ」とおそろしそうに話し合っていました。

　そんな環境のなかで、両親に私の気持ちをすぐにわかってもらうのはむずかしい、しかし、社会科学の文献が教える道の正しさは疑いない――このジレンマのなかで、私の心は重苦しいものがありました。

東京へ行けば無産運動が……

――東大の経済学部をめざしたのは？

なにもぜひ東大でなくてはならないということはなかったんですよ。ただ両親が大学進学を熱望したのと、私自身東京へいけば、無産運動がある、文化運動もある、片上伸もいる。やはり日本の政治や文化の中心地でくらしてみたいという気持ちが東京行を選ばせたわけです。

　それと、大学の受験制度そのものが単純でした。経済学部をえらんだのは、文学は自分でわかるという気がして、社会科学を勉強したいと思ったからです。

　当時東大の経済学部の試験科目は、英文和訳一本でしたから、私はまだ日本語に翻訳されていない社会科学の英語の文献をどんどん読んで、英語の力もつけていったんです。つまり社会科学を勉強することと、受験勉強が統一してできたわけです。

　しかし、貧しい家計から多少とも学資を工面してもらってまで大学へいくことへの疑問は、ずっと私を悩ませていました。しかし、親たちの期待は大きいし、私自身も東京へでてみたかったので、東大を受けたわけです。

『「敗北」の文学』をこえて

芥川をふみ越えること、それが私の新しい人生への出発だった

母方の遠縁に書生として……

――評論『「敗北」の文学』を書いたのは、三百円の賞金が目あてだった、ということですが……。

　東大に受かったものの、家からの仕送りはしれていましたから、私は貧乏学生だったんです。母方の遠縁にあたる三井鉱山の技師をしていた人の家に書生のようなかたちで住込ませてもらいました。

　部屋の半分が物置で、あとの半分の三畳間ぐらいのところが、書生部屋みたいになっていました。その家は大きな家ですから、ふろなんかも、家族専用と使用人用と二つありましてね、もちろん食事も台所で小さいお膳で一人で食べるというふうでした。

　庭掃除、使い走り、ときにはその家の娘さんの買い物のおともをして、百貨店に行ったり、そんなことをしていました。着るものといえば、二年間、冬も夏も、一着きりの学生服ですませました。そんなぐあいですから、百貨店でやわらかそうな毛布をみたときには、「ああ、あれにくるまって寝たらどんなにあったかいかな」なんてね、つくづく考えましたね。

　書生部屋では、友だちをつれて帰るわけにもいかず、かといって友人のところに外泊するのもはばかられるという妙な具合で、なんとか一日も早く下宿して、独立したいというのが、私の一番のねがいでしたよ。

書き上げたのは二十歳の春

そんなときに総合雑誌『改造』が文芸評論の懸賞募集をしていることを知ったわけです。高校時代の同人雑誌『白堊紀』に、芥川龍之介についての短いエッセーを書いたことがあるのを知っていた友人たちに、ぜひ書けとすすめられたのと、三百円の賞金がはいれば、自力で下宿することができるし、借金も返せると思ったのとで、よし書いてみるか、という気になったわけです。

金のない私のために、名古屋のお寺の息子で、早稲田大学にかよっていた小桜秀謙という友人が芥川龍之介の全集を貸してくれました。私は友人たちといっしょにかれの家の別荘――といっても小さい建物で、日ごろはだれも住んでいないものでした。これは知多半島を対岸にひかえた海辺の小さな丘の上にありましたが、ここに春休み中こもって『「敗北」の文学』と題した芥川龍之介論を書き上げたのです。二十歳の春でした。海が、目の前なので、海にとびこんだこともありましたが、さすがに冷たくて長くは泳げませんでした。

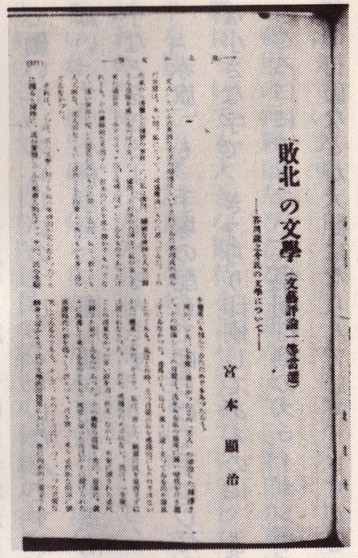
さいわいこの評論が一等に当選したおかげで、私は気になっていた松山時代からの本屋の借金を全部返して、のぞみどおり、本郷菊坂の下宿に移ることができたわけです。夏休みが終わったあと上京して、世話になった家に、下宿できることになったから、といって、これまでのお礼をのべました。おかしな書生兼居候だったわけですが、それでもせっかく気心もわかりかけてきたのにといってくれました。

"アカ"になるだけで犯罪に

――その評論を書いたころの考え方は？

芥川龍之介自身、晩年にはプロレタリア文学運動に、好意的理解

をもっていたわけですが、小市民インテリゲンチアとしての自分の立場を考えるとき、そこにすべてをすてて飛び込む勇気はない。それで悩んだ末に病弱なこともあって自殺した。当時のインテリゲンチアは、みんなそこで悩んだんです。



「敗北」の文學（文藝評論一等當選）

宮本顯治

雑誌『改造』に掲載された『「敗北」の文学』

私自身入学以来学校の講義は、山田盛太郎助教授の『資本論』ゼミに参加したぐらいで、あとはできたての図書館にかよい、経済学部のRS（読書会）にでたり、「無産者新聞」の配布を手伝ったりしていたわけですが、そんな私に世俗的な出世の夢を託している両親のことを考えると、やはり、憂うつな気持ちになることがたびたびありました。

だいたい私が東大にはいった一九二八年（昭和三年）というと、日本共産党の中央機関紙「赤旗」が非合法に創刊されたり、「ナップ」（全日本無産者芸術連盟）ができて、雑誌『戦旗』が発行されたりするなど、革命運動の陣営でも活発な動きがありました。

天皇制政府が、治安維持法を「改正」して、"思想犯"にたいする最高刑を死刑、または無期懲役にしたのもこの年なんです。文字どおりアカ＝共産党員になること自体が、犯罪とされる時代ですから、頭でいくら科学的社会主義の理論の正しさがわかっていても、いざ実践となると、おまえは五年も十年もの刑罰に耐えられるか、

拷問にはどうか、家族のおどろき、悲しみは――家族から「アカ」がでると、その家の娘は嫁のもらい手がないくらいの世の中だったんですからね――いろいろ考え込まないほうがおかしいぐらいでしたから。

しかし、そうしたなかでも、多くの若者たちが、苦難を知りつつ、その道を歩んでいったわけです。私もこうした苦悩に負けないで、理性のしめす方向に歩みぬこうとしていた一人ですから、そういう決意をこめて芥川の死をみつめなおすことで、さらにより積極的に生きることを、自分に説きあかしたわけです。

はじめて「赤旗」を手にして

――共産党が非合法化されているなかで、どうやって党を知り、入党したのですか。

「『敗北』の文学」を書いたものの、『白堊紀』の作品を注目してくれていた片上伸もなくなっており、文壇には一人の知己もなくて、早稲田のグループ、逸見広や浅見淵らにさそわれるまま『文学党員』という同人誌に『評価の科学性について』という論文を書いたりしていたところに、郷里の中学の同窓で、二年ばかり上だった手塚英孝が『戦旗』の活動にくわわらないかといってきたんです。

医者のおとなしい息子と思っていた手塚が日本共産党の組織の線で働いているらしいのでびっくりしたんですが、それで作家同盟にはいって、小林多喜二、窪川鶴次郎や中野重治、それから中条百合子などを知るようになるんです。

「赤旗」も、手塚の配布ではじめて手にしたわけですが、きれいな小さな字で、きっちり印刷してあるのに、まずおどろきました。日ごろ口にできない天皇制打倒のスローガンや労働者の無権利状態の打破などが大胆にならんでいて、さすがという感じがしたのを

おぼえています。

郷里の両親はたびたび手紙などで、お前が東大さえ出ればと、就職についても大きな期待をよせてきていました。私は講義のプリントを買って卒業試験を受け、大学を出たんですが、その後も徴兵のがれのために、日大の芸術学部に籍をおいて、『戦旗』の仕事に力をいれ、郷里にも帰らなかったんです。母からは、私が東大をでたということで、貴族院議員の娘との縁談があるがどうかという手紙もきていました。

理性の声に従い苦難の道へ

いつもやさしかった母や、私のために自分たちは商業学校に行くだけで、店の手伝いをやっている二人の弟のことを考えると、やっぱり自分はこの道をいくしかないという思いは強かったですね。

それで思うのに、私の場合、学生時代、史的唯物論、哲学をふくめて科学的社会主義をかなり勉強したということが、こういう場面にもたじろがないでいられた大きな要因ではないかということです。哲学をうんとやったということは、社会をみる基礎をしっかりつくったということですからね。

まもなく手塚が私に入党をすすめました。私は、むかしおしゃれな中学生と思っていたかれがすでに党にはいっていたことにおどろいたのですが、ちょうど新聞にはあいつぐ共産党員の逮捕事件が報道されていて、そのなかには、同郷の市川正一の名前もありました。

はたして自分が、こうした苦難に耐えられるだろうか、時として複雑な不安や文芸評論などで使った言葉でいえば「うっ屈」――重苦しいものがよぎることもありました。しかし、この道しかないという理性の声もまた、私の胸をみたしていましてね、入党を決断したんです。二十二歳の初夏でした。

嵐のまっただなかへ

息苦しい地下活動、「逮捕されても決して屈しまい」と多喜二らと誓いあって……

か。

——一九三〇年に入党したあと、どんな活動をされたのですか。

文学運動に日々情熱をぶつけて

そのころ、ナップ（全日本無産者芸術連盟）の機関誌だった『戦旗』が、階級的、一般啓蒙雑誌となっていたんです。私はその仕事を手伝ったり、『プロレタリア文学』に論文を書いたりするほか、雑誌『改造』に小林秀雄論を発表したり、東京日日新聞に「文芸時評」を寄せたりしていました。『戦旗』は発行するたびに発禁処分をうけるといった半非合法状態でした。



『戦旗』

私はプロレタリア作家同盟にもはいっており、党の仕事としてはコップ（プロレタリア文化同盟）の党グループの一人として、また中央宣伝扇動部員として活動していました。そうした関係から、東京の上落合にあったプロレタリア作家同盟の事務所にもよく出入りをし、『一九二八年三月十五日』を世に出したばかりだった小林多喜二や窪川鶴次郎、江口渙、鹿地亘などと、文学運動について、長時間の論議をかわしたりしていました。

当時の文学運動は、共産主義文学の確立とか、前衛文学の推進とかいう主張が強かったために、なかなか『「敗北」の文学』でとりあげたような、過渡期の作家、同伴者作家がぶつかっている苦悩やインテリゲンチアの迷いなどにまで関心をもって対処していくことができないという弱点はもっていましたが、私たち自身は、先端の文学をどうつくるか、日々情熱をぶつけていたのです。

百合子もためらわず入党して……

——そうしたなかで百合子さんと……

そうです。はじめて会ったのは一九三一年（昭和六年）の初夏でした。やはり作家同盟の事務所で、なにかの会議の折にみかけたのです。そのとき彼女はすでに『伸子』など、りっぱな作品を発表していた文壇の著名な作家でしたし、ソ連へ旅行し『ソビエト紀行』など、たくさんの作品を日本に書き送ってもいました。

それでいて、時折、発言するときは「この点はどうなのでしょうか」というふうに万事、おだやかで、ひかえめなのが印象的でした。さらに、その後親しく話し合うようになってから、私が感心したのは、彼女がまわりの人たちやなかまから意見をきいたとき、かならず「ありがとう」ということです。彼女はそういう近代的なマナーのよさを身につけていました。

まもなく党は、作家同盟やコップのなかに党の組織をひろげることをきめ、私はその方面の仕事を担当することになりました。私は手塚英孝（作家）と相談のうえ、コップが出していた『働く婦人』の編集責任者で、コップ婦人協議会の責任者でもあった百合子に、入党をすすめることにしました。百合子は、私たちの話をきくと、自分は共産党こそ正しいと信じているといって、少しもためらわず、当然のことのように入党を承知してくれたのです。一九三一年（昭和六年）の十月、きびしい弾圧下での決意でした。

その翌年の二月、私たちは結婚しました。小林多喜二など党の同



宮本委員長が知り合ったころの百合子さん

志たちは「グループ会議で私たちが「結婚することにした」と報告すると、びっくりし、新聞にもゴシップ風に出ていたのでどうなのかと思っていたがといいながら、それはいいことだといってくれました。

新聞などは、百合子が著名な作家で、相手の私が左翼運動をやっているというので〝赤い恋〟式の記事をのせ話題にしましたが、私たちは、前途にまちかまえている苦難を思うと、うれしがってばかりいられないというのが本心でした。

「ユリちゃん」と特高がニセ電話

そうした予感はまもなく的中し、私たちの新婚生活は、わずか二ヵ月で中断されました。一九三二年（昭和七年）四月、百合子が検挙され、私は地下活動にはいったのです。

検挙された百合子は、党員ということがばれずに、八十二日でかえされましたが、地下活動にはいっていた私は、彼女にも自分の居所を教えず、二人の連絡は今野大力（詩人）がとってくれていました。

そんなある日、百合子のところに、私とそっくりの声で電話がかかり「ユリちゃん、ぼくだ。とても困ることが起こったのですぐ会いたい」というのです。

百合子は私の居所を知らないので、以前に私の連絡のものと会ったことのある喫茶店へでかけました。しかしいくら待っても私はあらわれず、そのうちどうもまわりの様子がおかしいことに気づきました。また、私がふだん「ユリちゃん」と呼んだことがないことも思い出したのです。百合子は、はじめてそれが特高のニセ電話だったことがわかったのです。

私はもちろんあとで、今野大力にこの話をきかされました。特高警察のやりそうな、手のこんだひきょうな手口でしたが、私が地下活動の原則を守っていたので、その手口にひっかからなかったわけです。いま問題になっている鬼頭ニセ電話事件と同じ手口を当時の特高は使っていたのです。

あいつぐ活動家の検挙のなかで

——二十五、六歳で全党を指揮する立場に立たれたのですが。

それは、たまたまおかれた状況のなかで、そうなっただけです。とにかく、あいつぐ活動家の検挙のなかで、一九三二年（昭和七年）十月には、私の松山高校の先輩でもあった党中央委員の岩田義道が神田署で虐殺されるなどの事件もあって、私や同じく地下にいた野呂栄太郎らと党の指導部を構成せざるをえなかったんです。

地下活動なんていっても、いまの若い人たちのイメージにはぴたっとこないかもしれませんが、とにかく朝、家を一歩でたら、いつ検挙されるかわからない時代ですから、毎日が、鉄砲玉の飛んでくる戦場にいるようなものでした。

町を歩いていても、なにかこう大きな息がつけないような、ちょうど水にもぐっているような感じで……。さんさんと日がふりそそぐ町なみのなかにいても、公然と大手をふって歩けないということで、なにか一種の違和感がありましたね。ちょうど先の長いトンネルにはいった旅みたいな……。

しかし、そうした毎日はいわば実戦ですからね、きたえられることは事実です。私なども、そうしたなかで苦難に耐えるだけでなく、敵のルールに屈しないでたたかいぬくという気持ちが、どんどん強くなりました。

ですから、みんなけっこう明るくてね、とくに小林多喜二や、のちにソ連にいった杉本良吉などは気っぷがよくて、メソメソしない人たちでした。

顔を合わせると、おたがいの変装がおかしくて、おまえは役場の書記にみえるとか、おまえは問屋の若だんなみたいだとか笑いあったものです。杉本などは芝居をやっていたせいもあって、羽織をきて、ふろしき包みを、片手にちょいとかかえこんだ姿など、なかなか堂にいってて、どこからみても町の若だんなにみえましたよ。

生活費は党のほうから不定期に四、五十円の援助があるだけで、私は百合子の工面してくれるお金を人づてにもらって活動を続けていました。

そんな私たちにとって、一九三二年（昭和七年）の春、地下活動中を検挙された蔵原惟人が、ひどい拷問にも屈せずがんばっているという知らせは、大きなはげましでした。「われわれも、かれにつづこう。けっして拷問に屈しまい」――そう誓いあったものです。

拷問は通じなかった

面会にきた母は、私のはれ上がった顔を見て「変わったのう」と……

多喜二の死をむだにすまい

――一九三三年（昭和八年）に小林多喜二が逮捕されたのは、スパイの手引きによるものでしたね。

そうです。当時の特高警察は、共産党を弾圧するための、もっとも有効な武器のひとつとして、スパイを使ったんですよ。

一九三二年のいわゆる大森銀行ギャング事件のように、特高警察は、秘密スパイをあやつって銀行をおそわせ、それを共産党資金局がやったこととして大宣伝しました。

また、党組織のなかにスパイをおくりこんで、組織そのものの破壊をくわだてるなど、全力をあげていました。

小林多喜二はこうしたスパイの一人、三船留吉によって、街頭連絡中を検挙されて、ひどい拷問の末、岩田義道と同じように、死体となって築地警察署からかつぎ出されたのです。

私たちは、党組織を守るためにも、侵略戦争に反対するたたかいをすすめるためにも、このようなスパイや挑発者から組織を守る方針をつよめなければならないと話しあっていました。

そうした矢先、当時日本共産党の最高指導者として、無期懲役の一審判決をうけていた佐野、鍋山の転向声明書が大きくトップ記事で報道されたんです。びっくりして、たしかめてみると、事実だということがわかりました。党の中央委員として、地下活動していた

野呂栄太郎や私たちは、ただちに正式の指導部会議をひらいて、日本共産党中央委員会の名をもってかれらを除名処分にすることを決定し、「赤旗」に発表しました。日本共産党中央が変節者たちに断固とした態度をとった。この発表は国際的にも大きな反響を呼びました。

佐野、鍋山の転向は、獄中にいた多くの共産党員の切りくずしに最大限に使われて、残念ながら、転向者がつづきました。しかし、市川正一はじめ獄中でも変節とたたかう同志たちの不屈の闘争がありました。私たちは、そうしたなかでも、小林多喜二の死後の最初の会議で、かれの死をいたみながら、「この死をむだにすまい」と誓いあったことを思い出して、変節者を除名した党中央の一員として、どんな今後の弾圧のなかでも党の旗を守って、原則的に不屈にたたかいぬこうということを心にちかいました。

小畑が突然あばれだして……

——小畑、大泉らスパイの摘発は、そんななかでおこなわれたのですね。

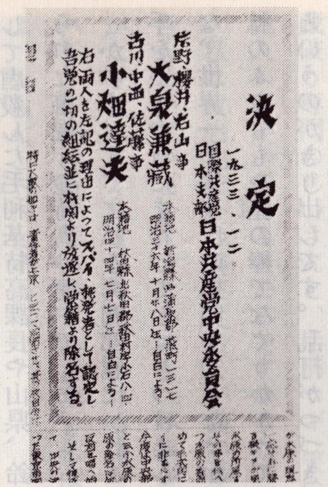
そうです。その年の秋、重い肺結核を病んで、しかも片足は義足という困難な条件で活動していた野呂栄太郎が連絡にでて検挙されたことから、かねてからスパイではないかという声が党内にもあった小畑達夫、大泉兼蔵への疑惑がいっそう深まって、直接本人たちに問いただして、調査することになったのです。

もちろん、党の最高の処分は除名です。私たちは、査問委員会をつくると、臨時の会合場所に二人をよび、査問をはじめました。密集家屋のたてこんだなかの小さい二階家ですから、私たちは静しゅくに査問がすすむよう心がけました。二人は、私たちの証拠と道理にもとづくしらべに、とうとう自分たちが、警視庁の特高と連絡を

とっているスパイだと自白しました。調べが一段落して、ほっとした私も、こたつにはいってひとねむりしていました。

そのとき、いままで部屋のなかで足をなげ出して静かにしていた小畑が突然あばれだしたのです。そんなさわぎが外に知れて、共産党員があつまっていることが警察にでもわかったらたいへんなことになりますから、私たちはあわててかれを静めようとしました。ところがそのうちにおとなしくなったので、ほっとしていると、こんどは様子が変だというわけで、急いで一人が人工呼吸を試み、私は柔道の活をいれましたが、しかし不幸にもかれは、回復しなかったのです。まったく予期しなかった、残念な結果でした。

私たちは、この二人をスパイとして除名することを「赤旗」に発表しました。しかし、特高警察は、これを党内の派閥争いによる「リンチ殺人事件」にデッチあげ、大々的に宣伝していったのです。


決定

一九三三、一二、

国際共産党日本支部日本共産党中央委員会

荻野、櫻井、右山事 大泉兼蔵

古川、中西、佐藤事 小畑達夫

右両人を左記の理由によってスパイ、挑発者として認定し吾党の一切の組織並に機関より放逐し党籍より除名する。

スパイ大泉、小畑の除名を報じる「赤旗」の1933年12月24日付号外

十数人の刑事におそわれて

——委員長が逮捕されたのは……?

党の東京市委員会にもぐりこんでいた荻野増治というスパイの手引きです。この男は私生活でいろいろ問題があって、かねてからスパイじゃないかと目をつけていた男だったんです。しかし、これで最後だ、あとはかれとは会わないようにしようと考えて連絡に出か

けたところをやられたんですね。

東京・九段坂上の喫茶店でしたが、ステッキや十手などをもった十数人の刑事に包囲されて、おそいかかられ麹町署に検挙されました。つかまるときひたいに傷をして、あとで何針か警察医がぬいました。いまあるまゆの上の傷あとは、そのときではなくて、学生時代に東大グラウンドで外科の先生たちとくんで野球をやっていたときのものです。私をむかえたのは、岩田義道や、小林多喜二を拷問して虐殺した毛利基特高課長や山県、鈴木警部など猛悪さでよく知られた警視庁の特高の連中でした。

かれらはすぐに私を拷問部屋につれこむと、いすにかけさせ、両手をいすの背にまわしてしばりつけました。刑事は「宮本よくきたな、世界一の警視庁の拷問を知らないか」などとうそぶきながら、私のふとももを樫の棒でなぐりかかってきました。まず住所をいえというのがきり出しです。乱打がつづき、私が失神しそうになると、水をかけ、またなぐり続けるのです。顔も何回となくなぐりつけました。

しかし私は、はじめからしまいまでひとこともしゃべらず、歩けなくなった私を看守がかかえて、足錠をかけ、まるで荷物でも放りこむように、留置場の独房に投げこみました。

一九三三年（昭和八年）も終わろうとする暮れの二十六日、監房の高い窓にはガラスがなくて、降るように雪がまいこむのに、いっさいの夜具もなく、寒さと拷問の痛みで眠ることができませんでした。

ところが、かれらはその後も私がなぐられてもけられても黙ったまま、とにかく口をきかないものだから「長期戦でいくか」といって夜も寝具もあたえない虐待をつづけました。

まるで別人のようになっているということに気がついたのは、は

るばる郷里の山口から面会にきてくれた母が顔をじっとみつめ「かわったのう」とつぶやいたときでした。むちゃくちゃになぐられて、顔がすっかりはれあがっていたもので、むかしの息子のおもかげがなかったんですね。

手錠、足錠のまま体操

——そういった留置場では、スリとか、カッパライとかといっしょだったんですか。

麹町は独房でしたが、私を奪還する計画があるといううわさがあるということで急に警視庁にまわされたんです。ところが、間もなく拷問の傷などからショウコウ熱にかかり市ケ谷刑務所の病監に収容されました。その後も都内の警察の留置場を転々としました。二度目に警視庁に移されたとき、なんとかいう〝不良少年〟と、土蔵破り専門のじいさんと、手形サギ（笑い）。あそこは、その道の一流人がはいってくるところですからね。

私は政治犯でかつ警察ぐらしが長いので、この連中も、一目も二目もおいていました。なかでも〝不良少年〟が、私に着物のたたみかたを教えてくれましてね。かれらは、当時でもおしゃれで、そういうことにも通じていて、いまでも私は和服のたたみかたについては、きちんとやれますよ。

ふろには市ケ谷の病監を出るとき一回はいっただけで、あとはずっとはいれず、本もいっさい読ませない。ただすわってるだけです。府中にいたときは、二ヵ月間ぐらい足錠、手錠をかけられたままでしたよ。

私はそれでも、毎日独房内で体操をやるなどして、体力のおとろえをふせぎました。

当時はもちろん黙秘権というものは認められていなかったわけで

すが、私はどんなに拷問されてもしゃべらずにがんばりました。拷問といっても、うける側の肉体的限界があるんですよ。こちらが失神してしまうと、やっても意味がないというところですかね。



拷問によって虐殺された多喜二の通夜にあつまった仲間たち



労働者をはじめ国民各層の大衆運動も暴圧にさらされ、メーデーも1935年が戦前最後に——

鉄柵の中の日々

自問自答で党再建の道を

拷問にたえるのは最低の基準

——留置場や監獄で読書もできない状態のなかで、よくノイローゼにかかったりしませんでしたね。

やっぱりね、人間は覚悟をきめるということが大事なんですよ。もうここまできたんだから、ということで悠然とかまえて暮らすのです。私は独房のなかで、自分で自分に問題を出してね、頭の中でそれに回答していく。ちょうど禅問答のようなことを毎日くり返していたんです。

たとえば、共産党の活動は、いまひどい弾圧をうけてつぶされているけれど、どうしたらスパイの潜入をゆるさない党をつくることができるか、スパイがはいっても、それで被害が多くでないような党をどのようにつくるかとか、文化運動も弾圧され、打撃を受けたけれど、ああいう条件のもとでも、もっと効果的に発展させるやり方はないかとか、自分が当面している二つの重要な問題について、



1934年ごろの宮本委員長

毎日朝から晩まで考えつづけたわけです。

そうすると、そのなかから、連絡者を限定してきちんとやれば非合法下でも破壊されないような厳格な地下の党をつくることは可能だという確信が強まりました。

また大衆運動では、統一戦線的な方向、これはすでに、当時、アムステルダムでの反戦大会への参加とか、京都の滝川事件での大学の自治を守るたたかいへの広範なインテリゲンチアの結集とか、反戦、自由への大きな動きがあって、そういう観点を各分野で追求することの重要性などを実感として深めました。こうしてけっこう日が早くたちましたよ。

検挙されたあと、ただ拷問にたえるとか、党の組織を敵にしゃべらんとかは最小限の基準ですが、それにとどまらず私たちは新しい日本を建設する党なのだから、未来の展望についての積極的な心がまえが必要だったのです。

早くしゃばに出たいとか、どうせ組織も運動も破壊されているのだから自分一人がどうなってもとか、という式の自己中心の敗北的な姿勢から結局は変節がはじまるんですよ。

かといって私は、なにも野蛮な天皇制下の、政治犯を待ちうけている目前の自分の運命について甘い考えを抱いていたわけではありません。自分のあすが現実に苦難の連続であるとしても、運動と党の発展の可能性については基本的には洋々とした展望がありました。

うれしかった叔父のことば

——家族や親せきの心配はたいへんなものだったでしょうね。

共産党員というだけでなく、私には特高のデッチあげの起訴罪名がなすりつけられたわけですから、両親の苦痛は、はかりしれないものがあったでしょう。母は、よく中学の先輩のだれだれさんは士官学校を出て、いまでは「皇軍の陸軍大尉」になって出征しているのにおまえは獄中にいる、商売の取引先に、「あんたのところの息子は、せっかく帝大出てなんだ」といわれたなどと書き送ってくることがありましたよ。

しかし、息子への愛情はかわらず勘当するとかそういうことは、けっしていわなかった。もっとも貧乏な家だから、世間ていとか格式にあわないから勘当だというような考え方の生まれる余地もなかったようです。二人の弟たちも、私のかわりに親の商売を手伝ってくれていたけれど、うらみの手紙など一度もよこさなかったものです。

忘れられないのは、小学生のころの私をかわいがってくれた叔父が一度面会にきたときのことです。はじめは「おやじもおふくろもえらく心配している」と、私を説得にかかったのです。しかし、私がそれにたいして「いや、共産党の活動は考えぬいて私の信念でやってるんだから。それに世のなかはきっと私のいうようになるよ」というと、結局、途中でくどくのをやめ、「おまえがそこまで考えてやっているんなら、自分の信念どおりにやるがいい」といいのこして帰ってしまったのです。叔父の説得で、私の態度が変わるだろうと期待していた検事はすっかりあてがはずれたようすでしたが、私には叔父のさっぱりした態度がひどくうれしかったですね。

未決で市ケ谷刑務所にはいっていた一九三八年（昭和十三年）の六月、郷里の父が死んだ知らせがはいりました。父は脳いっ血で倒れたあと、永いことぶらぶらしていたんですが、私が検挙されてからは店先に出るのをやめてくらしていると、母が手紙で書いてきたあとでした。

60キロが40キロにへってしまい

——病気との苦しいたたかいがあったそうですが……。

一年間の警察ぐらしのあと、市ケ谷刑務所にはいったとき、毎晩ひどい寝汗をかくようになって、高熱が何日もつづきました。寝汗で、ふとんも獄内の衣類もみんなぐっしょりぬれてしまって、私ははだかで寝ていました。それでも獄医は診察もしないで仮病あつかいし、横になることも許さなかったのです。

巣鴨に移った一九三七年ごろには、私は腸結核でした。何度目かの予審判事が、いまさら君に転向などとはいわないが、せめて簡単な調書づくりに応じたら、とくり返していいました。やっとはいった病監も裁判の進行や刑の執行のためには、病人でも危篤でないかぎりどんどん強制的に動かしてさしつかえないといって応じさせるというかまえのところでした。あのロッキード疑獄では、小佐野賢治や児玉誉士夫など、病気を理由に尋問さえ許されなかったのから考えれば、まさに天と地のちがいですが、私たちのその時代は、病監で病人を病人あつかいにせよということが大きな闘争だったのです。

私は六〇キロあった体重が四〇キロ台に減り、衰弱のため髪の手もパラパラでした。もうまもなくおしまいだろうと思った看守はのぞき窓からしょっちゅうのぞいて「まだ生きている」とつぶやくありさまだったのです。

知らせをきいた検事は、とんできて「調書さえとれば病院で死なせてやる。遺書のつもりで調書をとるのが君のためであり、共産党のためではないか」とくどきました。

しかし、私はその話にのらないできました。死にそうだということとで急にジタバタしても筋が通らないと考えたからです。不思議なもので、そう決心すると、日々病気はよくなり全快にむかったので

すから、おかしなものですね。

監獄法を研究し次つぎ要求

——委員長は「獄中では合理的にねばる」ということをよくいわれていますが、それはどういうことですか。

監獄そのものはね、たとえば、食事の時間ひとつにしても、昼食が十一時ごろで、夕食が三時半、それで夕方は、早めに消灯という具合に、すべて看守の側のつごうにあわせてあって、在監者がくらしいいようになってないんですね。

健康の問題でもそうで、病監にいる病人でも、そこの面会室を使わせると、外部に重病だとわかるとめんどうだからというので、普通の面会室で長く待たされたうえに面会させるということを平気でやるんです。

監獄には監獄法というのがあって、当然かれらはそのルールを守らなくてはいけないわけだから、私はそういう法律なんか全部研究して、ルールにそっていろんなものを要求していったんです。看守でだめなときは看守長、それでだめなら所長というように面会を申しいれて交渉してきましたが、一度も懲罰にひっかかったことはなかったですよ。

しかし、空腹にはまいりましたね。こんなことなら外にいるときにもっといろいろ食べておけばよかったとか、あそこのドジョウ汁はうまかったなぁ、とかいろいろ思い出してね、あるときなんか、がまんできなくなって、さし入れの「わかもと」の錠剤をひとビン食べちゃった(笑い)こともあります。

くばられためしの型が、いつもよりちょっとでも大きいなと思えるようなときは、一瞬のやすらぎを感じるというような日々でしたからね。監獄の最大の肉体的苦痛は「飢えと寒さ」——これでしょう。

公判廷から網走へ

となりの監房を資料室に私は公判にのぞんだ

資本論などとりよせて完読

——あの時代に、よく監房を資料庫にさせるなんてことができましたね。

私が公判廷以外では、絶対にしゃべらないという原則をつらぬいたからです。いかに暗黒裁判とはいえ、裁判をするには公判前に調書めいたものがいるというわけですが、私は本人の陳述なるものをいっさいつくらせなかったから、私についてはなんにもないわけです。二十九日ごとの拘留更新のための拇印すら不当逮捕なんだから押す必要はないとおさなかったんですから。それで、公判は私が発言しなければ裁判にならないというわけで、裁判所は私のだす要求を認めざるをえなくなったんです。

私は裁判にのぞむにあたって、党の主義主張を正確にのべる必要があると交渉して、世間ではもう発売禁止になっていた、マルクスやエンゲルス、レーニンの文献など必要な資料をできるだけあつめ、隣の監房が臨時の資料庫となりました。そのなかにはそとで読みのこしていた『資本論』もあって、石板をノートがわりに公式などを書きながら完読できたのはなによりでした。また、裁判関係の資料や法医学書なども当然、熟読しました。

公判がはじまったのは一九四〇年（昭和十五年）ですから、日本が太平洋戦争に突入する前年でしたが、私は、かならず、日本は負け、戦争は近いうちに終わると信じていたので、将来のことも考えて、この公判廷での記録を速記にとることも裁判所に認めさせました。

いま思えば、その速記があったからこそ、こんにち『宮本顕治公判記録』として出版することもできたわけですが、これをふくめ裁判全体にかかった膨大な費用をねん出してくれたのは百合子でした。公判は、空襲下の東京で続けられたんですが、なにせ食糧難のために獄中の食事は日々貧弱になり、私はすわると、尻の骨がゴツゴツするぐらいにやせてしまっていましたよ。二人の弟が召集されたという知らせがはいったのもそのころでした。

万葉集や歴史書なども愛読

——この公判でスパイの死は殺人によるものではないということが証明されたのに、なぜ裁判所は一九四四年の最終公判で「無期懲役」の判決をくだしたのですか。

それは私が完全非転向の共産党の役員だったからです。同じ関係被告でも、早いうちに転向して、特高の筋書きに迎合する陳述をした一人は懲役五年で未決通算九百日、それよりちょっと転向のおそかった人は七年というように、思想状況に応じて科刑していく思想裁判だったんですよ。私はすぐに控訴しましたが、翌年五月に上告棄却の判決があって、懲役囚となりました。そして六月、網走へ送られることになったんです。

——獄中ではどんな勉強ぶりでしたか。

考えようによっては、未決のあいだは、時間がたっぷりあるわけですからね、人類の遺産のすぐれたものをうけつぎ発展させることこそ、共産主義者の任務だという観点で、しっかり系統的に学ぼうと計画をたてたんです。マルクスやレーニンの本は一番読みたかっ



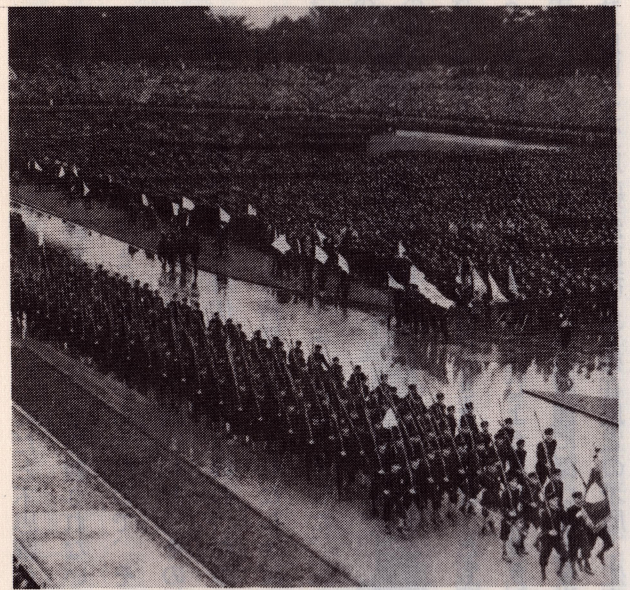
獄中で愛読した『万葉集』

たけど、監獄では絶対禁制の書で、のちに公判の準備をするようになってからは、いろいろとりよせることができるようになりましたが。私は、自分の勉強をいくつかのコースにわけて進めました。このなかには、日本の社会、経済の実態についてのものや法律関係書などのほか、文学、歴史、伝記ものもたくさんあり、『万葉集』や、福本日南の『元禄快挙録』、『名将言行録』なども愛読しましたね。とくに、日南の本にでてくる大石内蔵助や吉田松陰、それに当時は日蓮なども、自分の命などかえりみず主義主張に生きた人物として、世界観は別にして、印象ぶかく読んだものです。

侵略戦争は必ず失敗する

――網走ではどんな生活でしたか。

和裁工として、独房にすわって囚人用の作業着のつくろいをするのが仕事でした。ところが針というのは小さいですからね、目の前のボロにまぎれこみ、すぐ見失うんですよ。こりゃあたいへんだというので、はいずりまわって探したものです。そういうとき、自分の姿を心に描くと、われながらおかしかったですね。巣鴨で刑が決



それまで徴兵延期されていた学生たちも、つぎつぎに戦争にかりたてられていった

まってすぐやった仕事が荷札の針金つけだったから、さしずめ履歴書をかくとなると、職歴のらんは、「荷札の針金つけ」と「和裁工」ということになるわけですよ。(笑い)

網走は、夏とはいえ寒くて、看守の態度も荒く、私などはいってまもなく、返事が悪いというのでなぐられたこともありました。ただ、ジャガイモがたくさんとれて、食糧事情もそれほど悪くなさそうなのがなによりでした。

そういえば網走におくられていく途中、旭川あたりでだったか、アミ笠のなかからちらっとみた娘さんが、ひどくふくよかで健康的なのを「まだ北海道にはこんな元気そうな娘さんがのこっているのか」という思いでながめたことがありましたよ。

六月に東京を発つとき、看守たちは、私がトランクを亀の子のように背負っているのをみて、生きてしゃばの土はふめない身なのに、

どうしてそんな荷物を持っていくんだと不思議がりました。私は、侵略戦争はきっと終わる、どさくさで殺されないかぎり、かならず生きぬいてかえれるという自信があったので、そのときにはく雪駄までいれておいたわけですが、予測どおり、その年の八月十五日、日本帝国主義は無条件降伏し、戦争は終わったのです。

私は十月九日、治安維持法の廃止されたしゃばの土を、アミ笠のない自由なからだで十二年ぶりにふみました。三十七歳でした。

苦難のなかできたえられる

――獄中十二年、委員長のささえとなったものは……。

よく民青同盟の青年諸君に同じようなことをきかれるのだけれど、一口にいえば、私が共産主義の原理に深い確信をもっていたからだと思いますね。専制政治と主権在民との矛盾、生産手段の私的所有と生産の社会化との矛盾、こういったものが深い政治的矛盾をよびおこし、解決の方向にむかわざるを得ないという、社会発展の法則が、たとえ共産党が弾圧されようが組織がこわされようが、かわらず発展していくんだという確信ですよ。それが根底にあるから、当面自分のぶつかっている苦難も、このなかで自分たちもきたえられていくんだとうけとめたわけです。

またひとつには、幼いころから貧乏を経験してきたということも、役立ったのかもしれませんね。借金と差しおさえで両親が苦しみ、高校時代にはアルバイトなどでくらした――私の生活には小さいころから貧乏と屈辱が結びついていたわけです。だから、共産党の運動にはいって、被圧迫階級というものを理論的に知ったとき、私は日本の社会全体が牢獄みたいなものだと思い、なんとかそういう世のなかをなくしたいと活動してきた。決して自分一人だけが楽になればいいとかいった考え方は出る余地がなかったんです。

ですから、どうせしゃばには圧制の嵐が吹きあれていると考えていたし、主義をすててそこへもどれば、楽な生活ができるなんてそんな甘いさそいに動じる気持ちはみじんもなかったですよ。むしろ、そういう裏切りの思想を心から軽べつして徹底してたたかうという気持ちでした。

だが、いま考えると、日本の監獄というのは、こうした一人ひとりの決意を、完全に他と遮断した独房のなかにおしこめる一方、家族からの泣き落としを使うというやり方でつぶしていったんですねえ。

第二次世界大戦のときのナチスによるアウシュビッツの強制収容所の話とか、ベトナムでのアメリカの残虐行為だとか、いろんな例はありますが、ああした場合でも、たいてい集団でやられているんですね。ところが日本の場合は完全に一人、支配体制につごうの悪いニュースも聞かせなければ、人と話もさせない、まったく孤立させておいて、単純な作業を与え、日常性のなかで、闘志をしだいに失わせていく……。しかも、降伏し悔い改めないかぎり、気が狂うが死のうが、情をほどこすということは絶対ないんですからね。私は監獄を「私の大学」にしてきましたが、全体的にいえば、当時の日本の監獄というところは、チャップリンが、監獄の状態はその国の文明のバロメーターといいましたが、まさに、暗黒権力のもっとも野蛮な象徴でした。

はればれと公然活動へ

歴史の巨大な一ページは、われわれのいう方向にぐっとひらいた……

感慨をもって見た網走の灯

——十二年ぶりに網走刑務所から東京にむかわれたときの心境はどうでしたか。

監獄の門前で私を出迎えてくれたのは、釈放者の世話をする「保護会」の五十がらみのお坊さんでした。黒い僧衣にモンペをはいたこの人は、私が巣鴨の東京拘置所から背負ってきた重いトランクを小荷物扱いにしてくれたり、夕食をだしてくれたり、なにかと気をくばってくれました。私はこの人の口から三木清や戸坂潤君の獄死を知りました。



政治犯の釈放をよろこぶ人たちのデモ行進

網走の駅で東京行きの切符を買おうとすると、売り切れで、やむなく函館までの切符にしました。

夜汽車の窓から去りゆく網走の町のうすぐらい灯火を、私は感慨をもってながめましたが、列車はまもなく暗い広大な北海道の原野にはいりました。函館でまた、海が荒れて二晩足止めをくいました。どこの旅館も満員で、やっと若松町のある旅館のふとん部屋に泊まることができました。

私のそのときのかっこうは、まえに巣鴨から網走へ私をおくった看守たちが「無期囚がそんな荷物を持っていってどうする」といったトランクに入れてきた大島紬の和服に雪駄ばきでした。終戦直後の列車内や町通りは、国民服やモンペ姿であふれていました。そのなかで私の和服姿は目立つせいか、ジロジロと見られたものです。事情を知らない人たちの目には不思議にうつったのかもしれませんね。

函館の宿から母に手紙を……

——郷里のお母さんに手紙を書かれたのは、その函館の宿ですか。

そうです。その内容は「予想していたとおり、私どもの思想を迫害することはまちがいであることが、日本においても確認される時期がまいりました」といったものです。いま読むと、少々漢語調の用語が気になるようなところもありますが（笑い）、とにかく息子の思想は十分理解できないけれども、あの息子のことだ、やることにはそれなりのわけがあるのだろうと、じっと見まもってきてくれた母にたいする私のあいさつだったわけです。

函館から青森に渡ると、すっかり焼け野原になっていました。駅前にずらりとならんでいる屋台で、刑務所からもらった給食券でにぎりめしとかんづめを買ってそれを列車内での弁当にして、やっと

上野についたのは、一九四五年十月十四日でした。すぐ駒込林町の百合子の実家をめざしたのですが、私自身その家には一度いったきりで、うろおぼえだったのと、戦争で東京の様子がまるっきり変わっていたのとで、あちこちまよったすえ、やっとたどりつきました。

百合子をはじめ家の人は、みんなびっくりして迎えてくれました。

そのあと、その家の二階でくらすようになるわけですが、あの軍国主義者が打撃を受けて、凶悪な非国民あつかいにしてきた共産党員をかれら自身の手で釈放せざるをえなくなった――歴史の巨大な一ページが、われわれのいう方向にぐっとひらいたわけですね。獄中での十二年のたたかいがむだではなかったというだけでなく、われわれが夢みた共産党が公然と活動できる世の中になったんだということで、私の気持ちは晴ればれとしていました。私は休むまもなく、当時国分寺にあった共産党再建の事務所へ出かけていきました。

敬意と期待、だが偏見も……

――当時、共産党への国民の関心や期待はどうだったのですか。

東京は、焦土ということばがぴったりな様相で、私がいた巣鴨の拘置所のあたりも、へいぎわまで焼けていました。国分寺から代々木へ移った党本部まで国電でかよっていましたので、自宅から駒込駅か日暮里駅まで歩いていたのですが、そこも一面焼け野原でした。

こんなありさまですから、日本の自覚した人たちや知識人、戦時中、軍国主義に心ならずも表面きって反抗できなかった人たちなど、日本共産党こそ侵略戦争に反対し、主権在民のためにたたかった政党であるという敬意の念と期待をもって党に急速に接近してくるということが、大いにありました。

しかし、戦後日本の民主化というものが、日本人民の手でかちと

ったというより、ポツダム宣言を受諾した日本政府に連合軍の代表としてアメリカ軍がのりこんですすめたというような点があったうえ、まだ共産党への一般的な偏見などものこってました。一九四六年四月の総選挙では、得票率三・八％で五議席しかとれないというような社会情勢の制約がありました。



解放運動犠牲者追悼集会であいさつする宮本委員長（1945年11月）

宣伝や『前衛』などを担当し

――宮本委員長自身は、当時どんな活動をされたのですか。

私は党の政治局員として、宣伝・教育・文化部門の責任者をやり、また中央機関誌『前衛』の主幹を担当し、さらに統制委員会の議長もやっていました。『前衛』の創刊号に、私は「天皇制批判について」という論文を書きました。天皇は、私たちにとっては日本のあの暗黒時代の専制支配の実体であり象徴ですからね。三百十万の人間が天皇のためにと死にかりたてられ、いっさいの宗教や思想が弾圧された。天皇制は、日本の民主的発展をさまたげる最大の防波堤だったともいえます。

当時、天皇はマッカーサー司令官を訪問したりして、日々そのメッキははげてはきていたんですが、アメリカはアメリカで、また天皇制をうまく利用して日本の資本主義体制を維持していこうとしていたわけです。私は、あの治安維持法下での公判廷で、あらかじめ裁判所

から「天皇について不敬なことをいったら、公判廷は非公開にする」といいわたされていました。そのため公判を公開にするためには、天皇のことはあまりふれることができなかったといったいきさつもあったので、私は『前衛』の第一号にこれまでいいたいことを論文に書いてのせたのです。

民主民族戦線結成を訴えて

――永い獄中生活のあと、すぐ多忙な生活にはいって、健康のほうはどうだったのですか。

両足のふくらはぎがはれて、三十八、九度の熱が出るという病気にかかりました。ふくらはぎの急性筋炎だったのです。獄中であまり動けなかったのに急に歩きすぎたのが原因のようでした。

当時、党は日本の完全な独立と民主主義をめざす民主民族戦線結成のアピールを出していましてね、私は、その担当者だったものですから、国鉄その他いろいろな労働組合の中央委員会の会議や民主団体の集会に出かけていって、直接呼びかけるという仕事をしていたんです。この運動はやがて、九十余団体、千百万人が参加する民主主義擁護同盟という、日本の歴史上最大の統一戦線組織に発展しました。

平和運動なども創成期で、当時、朝日新聞の記者をやっていた畑中政春氏なども熱心に参加してきていましたね。そういえば、そのころよくいわれたのが、私の歩きかたがひどくゆっくり、ゆっくりしているということでした。これは獄中であの深編笠をかぶってゆっくり歩く囚人の習性がのこっていたんでしょうが、食事などもかなりのあいだよくかんで食べるクセがついていましたね。これも監獄で栄養のないものでもよくかめば、少しはからだのたしになるだろうなんて考えて実行していたためですよ。

試練をかいくぐって

ルールさえ守れば党はかならず統一できると確信をもって

抑圧者としてのアメリカ

――抑圧者としてのアメリカの姿を身近に感じられたのは……。

まえにものべたように、私たちへの弾圧のテコとなってきた天皇制にたいして、公然と批判できることは、まさしく新しい時代のはじまりでした。しかし、こんどはそこに、アメリカ軍の占領支配という事態が加わってきました。

私が抑圧者としてのアメリカの姿にぶつかったのは『前衛』編集の仕事をとおしてです。ポツダム宣言の完全実施を要求する立場からの論文や独立を強調するような論文などみんなアメリカの批判になるといって、GHQ（連合国軍最高司令部）の検閲で削除され、印刷の組み直しを命ぜられることがたびたびありました。

天皇制時代の検閲は「×××」と伏字にさせられましたが、アメリカは削除がわからないように印刷の組み直しをさせたのです。

また、かれらは「査察」と称して、党大会などへも顔を出し、私たちの動きを監視していました。そのため行動綱領に「日本の完全な独立」をもりこんだ第六回党大会では、この議題の報告者だった私は、報告の前日、党本部の食堂に代議員をあつめて非公開で、アメリカの占領の実態がポツダム宣言に違反していることなどを説明したものです。

しかし、そういうアメリカでも、あの暗黒時代に日本共産党が軍

国主義にたいしてたたかった党であるということは認めざるをえなかったんですね。私たち政治囚の復権問題について、あれは治安維持法下での有罪であって、その法律が廃止されたうえは、当然無罪であるという見解をとりました。これはなにもかれらが共産主義者に好意的だったからというようなことではありません。のちには私たち全員を公職追放にしたわけですから。日本の頑迷無比な軍国主義者にくらべれば、かれらは一定の「近代性」をもっていたということでしょうか。

党の分裂はなぜおきたのか

――その後「五十年問題」と呼ばれる共産党の分裂がおきましたが、なぜあんなことになったのでしょうか。

事情はいろいろあります。当時、第六回党大会（一九四七年）の行動綱領、日本の完全独立を強調し、民族民主統一戦線綱領と、それにもとづく大きな運動など、実際的には情勢を考慮した前進的な活動方向が出てはいましたが、戦後の日本の情勢について、正確な綱領的展望が練りあげられていなかった。

日本共産党は戦前、絶対主義的天皇制を打破するなどブルジョア民主主義革命論でずっとたたかってきたわけですが、戦後、アメリカが事実上日本を支配する大きな要素となり、日本の反動勢力と結託したなかで、共産党がどういう戦略的展望をもったらいいのか。その点、新しい綱領をつくる問題にとりくむことになったときに、当然さまざまな意見が出ましたが、そのなかで、指導部の一部が、論議をつくし、ルールにもとづいて解決をはかるということをしないで、意見の合ったものだけで、事実上、別の指導部をつくろうとした。これが、指導機関の分裂という最悪の事態を招いた。これが最大で決定的な原因でした。

しかも国際的にも共産主義運動がまだ未熟だったため、ソ連や中国の党からの介入がかえってこの分裂の事態を複雑にしたこともいなめません。

党の内部問題は外に出さぬ

――宮本委員長は、当時どんな気持ちで活動していましたか。

マッカーサーが党の中央委員全員の公職追放を命じるという、党としていちばん団結しなければならない、困難なときに党が分裂したのですから、こんなにつらいことはありませんでした。しかも、党政治局の分裂に応じて党組織が割れ、そこから相互抗争がおこったり、分裂した一方の側の極左冒険主義的な動きがひろがるなど予想もできない事態のなかで、党は国民の支持を失っていきました。一九五三年の総選挙では、以前の得票の六分の一の六十五万票で、議席はゼロに低落してしまったのですからね。

しかし、これが二つの共産党という形にならないで、第七回党大会（一九五八年）で党の統一をかちとることができたのは、ほんとうに不幸中のさいわいだったと思うのです。

私はたとえ意見がちがっても中央委員会の機能を回復することが先決で、意見のちがいがただちに組織的な分裂になるということはありえないという考え方をしていました。

いろいろな苦難に耐えてきた同志たちばかりなのだから運動は洋々と発展するという希望に燃えていただけに、こうした内部的な混乱は残念でたまらない気持ちはありました。しかし、共産党というのは、かならずルールさえ守れば統一できるんだというそういう確信と未来への展望がありましたから、絶望したり、そうした党の内部の問題を外へ持ち出したりするようなことはいっさいしませんでした。

ちょうど当時の『文芸春秋』が、私に分裂問題について執筆してほしいといってきていたのですが、私は党の内部問題は外部に書くべきでないとことわったのです。どんな混乱時でも、自主的な規律というものは大事です。

この時期、百合子の文学をめぐるさまざまな論争が激しくなったこともあって、私は文芸評論を書いたり、百合子がなくなってからは、その全集の編さんや解説を書いたりしましたが、大変勉強になりました。そういう意味では一時、党機関のなかでの活動はできなかったけれど、自分のべつな側面での能力をのばすことに精力を使えたこの日々は、私にとってけっしてむだではなかったと思います。

突然おそった百合子の死

――百合子さんは、党の分裂のさなかに……。

そうです。突然の死でした。百合子はあの長編小説『道標』を書きおえ、つぎの『春のある冬』、『十二年』などの作品の構想を練っていた時期でした。監獄で熱射病でたおれ、失明状態になったそのときの打撃が彼女のからだにのこっていました。

いまふりかえってみると、とにかく彼女には休養とか散歩とかそういうことがなさすぎたと思いますよ。小説、評論の執筆、そして社会的な活動への参加――猛烈に仕事をしていたのです。党の分裂にも、非常に心を痛めていましたね。当時、百合子を国会議員にという声まであって、彼女は「自分は作家であるから作家としての才能を生かしていくことこそが日本の革命運動にも党のためにも真の役にたつ」といってことわっていたんですが、なにせ彼女は著名でしたから、あれを参院選の全国区で出せば当選するだろうからぜひというせっかちな見方が一部に強くあったんです。出馬しないのはけしからんという攻撃もありましたが、彼女は泰然としていました



百合子さんの告別式であいさつする宮本委員長

ね。

ま、彼女自身は不幸な党の分裂の時期に世を去ったわけですが、そのご党が統一を回復するなかで、彼女の文学についても正しい評価が確立され、「多喜二・百合子賞」も制定されているように彼女の業績を記念することも当然だというふうになってきています。

これは、運動の内部にも、いろんな不合理とか、さけがたい矛盾はおこる。しかし、そういう場合にも絶望したり、だから共産党はいやだといってやめたりするというようなことをしないで、こうした矛盾がおこるのは、事物の前進の過程ではしばしばみられることであるというような、達観するというか、そういう気持ちをもつことが必要なんですよ。

私が獄中にいたときは、この圧制は、かならず倒れるという確信、これが私をささえたけれど、戦後のたたかいは、私たちにいろいろな矛盾や困難はおこるけれど、それによって党員として運動の基本的な目標や使命を見失うということはおろかなことであるということを、教えていますね。

上げ潮に向かって

統一を回復した党の最大の仕事は綱領をつくるということだった

——綱領の草案作成のため、日夜、苦労されたそうですが……

あの一九五〇年の党の分裂で、党は国民の支持を失い、政治的にも組織的にも深い傷をおっていました。党の再建には党組織の整備とともに、日本の現状を正しくふまえた、新しい綱領の作成が必要でした。その場合、私はあくまでも自主的、創造的に綱領をつくることが大事だという考えをもっていました。

今日では、きわめて当たりまえのことですが、当時は綱領というようなものは、ソ連共産党や中国共産党と相談してつくるものといった考え方が残っていて、党内の一部から相談すべきだという意見も実際にでました。しかし、それでは、五〇年問題のにがい教訓を生かすことにもならないので、私たちは自分たち自身の手で綱領をつくるやり方をすすめました。

日本の現状ふまえた綱領へ

——その綱領草案の特徴は？

それは、当時どこの国の共産党も定式化していなかった反帝反独占の民主主義革命の段階をへて、社会主義革命へという、新しい創造的な革命路線をうちたてたことです。

というのも私たちが、アメリカが日本にたくさんの軍事基地をもって、軍事的に日本をおさえているという状況をみながら、従来の古典的な革命理論を日本に適用するというのではなくて、科学的社

会主義の民族論、革命論を日本の現実に創造的に適用して、日本革命の方向を究明していったこと、そして同時に、日本国民の敵は、だれかという問題を探究していって、アメリカ帝国主義と日本独占資本という二つの敵とのたたかいという政治路線を明らかにしたからでした。

実践のなかで理論ためして

——その綱領草案がなぜ一九五八年の第七回党大会で採択されなかったのですか。

党内には、民主主義革命を経ないですぐ社会主義革命へという考え方をとる人びとがいて、この綱領草案をめぐって大会は紛糾しました。綱領問題の報告者だった私は、野次や怒号のなかで、なん回も演壇に立って説明をくり返しましたが、約三分の一の代議員がこの綱領草案に反対しました。のこりの三分の二の代議員は賛成だったわけですから、多数決できめることもできたのですが、私たちは問題の重要性からみてあえてそれをせず、当面の政治方針と行動綱領だけをきめました。そして『団結と前進』といった論争誌などで、つぎの第八回党大会まで全党討議をすすめること、また実践のなかで理論をためすことになったのです。

この大会で私は書記長に選ばれ、中央委員会では、綱領問題小委員会の責任者にも任命されました。小委員会の事務局には、現副委員長の岡正芳、西沢富夫、こういう人たちがいました。十五人で構成された小委員会は、八回党大会までに綱領草案を中心に二十九回にわたる討議をかさねて、草案を練りあげる努力をつづけたのです。

いま考えると、あの第七回党大会で多数決で押し切らず、論議をつくして綱領をきめるという方針をとったことは、ほんとうによかったと思いますね。

たびたび総評とも話し合って

——綱領採択までに、あの安保闘争があったわけですね。

ええ。あのときは、私は書記長として、統一戦線をつくるという観点から、社会党や総評との接触を深める活動の先頭にたちました。私はたびたび総評にでかけていって、当時の岩井事務局長と安保改定反対の大統一行動の前進という問題で話し合いました。私たち共産党はオブザーバーということで、社会党も総評も対等の団体として扱わなかったんですよ。しかし、そういう状況に負けずにがんばりましたね。

安保闘争は、非常に強大な闘争のうねりをつくりだし、また地域にもさまざまな統一戦線ができ、国際的にも注目されるたたかいとなりました。こうした運動のなかで、日本共産党の戦列も大きくなりました。日本は独占資本主義国なのだから、独占資本をたおせば、



新安保条約批准阻止3000万国会請願署名への協力を訴える宮本委員長（1960年）

社会主義だ、というような単純な考え方ではなく、サンフランシスコ体制、安保体制の打破なくしては日本の革命運動の成功はないというこの立場が、実践のなかでためされ、多くの党員の確信となっていったのです。

こうして一九六一年の第八回党大会では、最後までかれらの社会主義革命論にこだわった連中、春日庄次郎とか内藤知周とかは、大会を前にして、自分たちはもう大会では勝てないとみて、党から脱走して分派をつくりました。

しかし、大会では、これまで綱領草案に反対していた人たちも全党討議の経過と実践をつうじて確信をもち、全員一致でこの綱領路



全員一致で綱領を採択——1961年の第８回党大会

線に賛成の票を投じたわけです。

そのごのわが党の発展、この十数年間の躍進が、このときから加速されたといえるわけですが、どんなときにも、団結をねばりづよく保ちながら論議をつくすことは非常に大切だし、同時に、いったん結論がでたら、それには従っていくという民主集中制、それこそ党の生命力であるとつくづく思いますね。

彼女は行動的で率直な人……

——大森寿恵子さんと再婚されたのはいつごろですか。

第七回党大会の準備に奔走していた一九五六年の五月です。彼女は、百合子の元秘書で、百合子がなくなったあと、百合子全集を出す仕事を戸台俊一君と手伝ってくれていました。二年間に十五巻の全集を出すのだからみな大変でした。私もほぼ月に一回、その全集に四、五十枚ずつ解説を書くというずいぶん忙しい仕事をつづけていました。解説の校正刷りの手直しを校了ギリギリまでやるということがたびたびありました。彼女はかなり行動的で率直な人だったものですから、印刷工場まで自分で飛んでいって「なんとかなおしてください」と工場長にたのみこむという役目をしょっちゅうやってくれていたわけです。そういう意味では私は彼女に、たびたびお世話になって迷惑をかけた関係なんですよ。(笑い)

長男が生まれたのが、第七回党大会の開催中で、名前を考えようと思っても、まえにも話したように、もめにもめた大会でしたから、なかなかうまくいかず、名前をきめたのは、届出しめ切りのギリギリの日でした。

その年の暮れ、郷里の母がなくなりました。孫も生まれたことだし、上京して東京に永住するということで、私たちもそれにそなえていたのですが、脳いっ血で急に倒れたのです。七十六歳でした。

一週間ほどこん睡状態で、私はそばにつきっきりで看病し、臨終をみとりました。当時母は、私が党の仕事で外国へ行くということを夢のようだと話していたそうです。どうせ監獄から帰らないだろうと考えていた息子にこんどは孫ができたというので、非常によろこんでいたらしかったのですが……。

歴史的だった日曜版の創刊

——一九五九年三月に「赤旗」日曜版が創刊されましたが、この発刊を思いつかれたいきさつなど。

フランスやイタリアの共産党機関紙が日曜版を出しているということがヒントになったわけです。まあ、外国の党の経験のいい面を学んだわけですね。ところが、これを事前に相談したとき、赤旗の経営畑の幹部をふくめてかなりの同志が「日曜版を出したら『赤旗』の日刊紙のほうが売れなくなるのでは」という疑問を出しました。私は「そんなことはない。日曜版を出せば日刊紙もふえる。相殺ではなく、相乗だ」と力説してはじめたんですが、いまでは名実ともに週刊の新聞としては日本最大という記録をうちたてているわけですからね。日曜版の創刊は、戦後のわが党の歴史のなかでも、重要な事件であったといえますね。



「赤旗」日曜版創刊号

試練のなかの自主独立

分裂は侵略者をよろこばせると
反帝国際統一戦線をめざして

ベトナム支援で統一訴えて

——一九六六年にベトナム、中国、北朝鮮の三国を訪問されましたが……

当時は、ベトナムにたいするアメリカ帝国主義の侵略が激化しているのに、ソ連と中国が仲たがいして、侵略反対の国際的なたたかいの足なみがそろわないという状況でした。あきらかにこのような分裂は侵略者をよろこばせるものです。

私たち日本共産党は、ベトナム支援の反帝国際統一戦線の結成をよびかけ、ベトナム、中国、朝鮮の三国をまわって、それぞれの党の首脳部と話し合ってきたわけです。

この訪問の最大の問題は、中国共産党がアメリカのベトナム侵略に反対する国際的な統一行動にソ連をいれるべきではない、という見解をもっていることでした。

私たち日本共産党も、ソ連共産党とは多くの問題で論争中でした。しかし、それはそれとして、ソ連がベトナムの抗米闘争にすくなくとも具体的な支援をしているかぎり、国際的な統一戦線からソ連を除外すべきではないと主張していたのです。

中国側がソ連攻撃を主張……

——中国共産党が納得する見通しをもっておられましたか。

ソ連を加えた国際統一戦線に反対しているのは、中国共産党の既定の方針らしいが、毛沢東自身によく話せばわかってくれるのではないか、毛沢東自身はもっと深い考えをもっているのではないかなど、困難は予想しつつも、思っていました。

——というのは……

かれが、中国革命にあたって非常に思慮深い指導の理論をうちたてたし、国際的にも一定の評価を受けている指導者であったからです。

また私が一九五九年のソ連共産党第二十一回大会に参加した帰り道、鄭州（ていしゅう）で毛沢東と会ったとき、かれは自分のほうから、あの五〇年問題で日本の党が分裂していたとき、スターリンなどの外部からの干渉に中国共産党も同意したのは正しくなかった、日本共産党にたいしてすまないことをしたと率直にあやまったんですね。これには私自身びっくりしたのです。これは大きな人物だと思ったわけです。

——実際に会ってみて、どうだったのですか。

私たち党代表と劉少奇ら中国代表たちとの会談は、難航し、打ち切られたのですが、朝鮮からの帰りに先方から会談再開の申し入れがあって、こんどは周恩来が代表でやっとまとまり、共同声明に調印して祝杯まであげました。ところが、そのあと上海にいた毛沢東に会って帰国するということで、飛行機で行きました。

何年ぶりかに会った毛沢東は、看護婦に手をひかれて動くなど、立居はやや不自由そうでしたが、眼光はするどいものがありました。

会談にはいるとかれは、ソ連を名ざしで攻撃しなければ、そういう共同声明を出す意味がないということをいいはじめ、くりかえし主張してそれをゆずらないわけです。交渉経過もあるので、北京の連中は「軟弱」だとさえいいました。なんとかれが、ソ連をふくむ統一戦線の一番の拒否論者でした。私たちは意外でしたが、それは

正しくないと、これまたくりかえし反論しました。同席したのは、先方は康生、趙安博ら、こちらは岡正芳、蔵原惟人、米原昶、砂間一良、工藤晃でした。通訳を介して二日間にわたり数時間、おたがいに自制のある静かな口調ながら、中身はきびしい論議をつづけましたが、まとまりません。毛沢東はとうとう、こういう会談はなかったことにしようといいだして、共同声明もご破算になったわけです。それでも毛沢東は、私たちがかれの邸宅を去るときには、玄関まで見送りに出ました。

団結の大事さ示すホー主席

――外国の党の指導者にも数多く会われたでしょうが、ホー・チミン主席の印象は？

一九六六年のベトナム訪問で、ホー・チミンさんと再会しました。というのは、まえにソ連共産党の第二十一回大会に参加したときベトナムの大使館でかれと会い、いろいろ話し合ったからです。ホー・チミンさんは、日本に深い関心をもっていて、そのときも日本の党がやっと公然と活動できるようになって、ほんとうによかったと



1966年、ベトナム訪問のおり、ホー・チミン主席と握手

感慨深げだったものです。

再会したときも、私たちの訪問を心から喜んでくれました。世界情勢にも明るい人ですから、私たちの反帝国際統一戦線の提案をよく理解してくれて、この旅で、その提案がうまくまとまればいいが、前途にはかなりの困難があるだろうといった懸念をのべていましたね。団結というものは非常に大事なことだといって、右のてのひらをひらき「こんなふうに五本の指がバラバラではだめだけれど、こうすれば力になる」とこぶしをつくってみせたのが、たいへん印象的でした。

分裂さけるために力を……と

――中ソの対立がおきたとき、どんな感想をもたれましたか。

時期としては、三ヵ国訪問よりずっと前のことですね。

中ソの対立は一九六〇年にはいってから、いろいろでてきましたが、この年の九月から十月にかけてモスクワでひらかれた八十一ヵ国の共産党・労働者党代表者会議の予備会議の席上でもするどい中ソ論争がおこなわれました。理論的原則を守りつつも、あくまでも国際共産主義運動の団結を守ろうとする私たち日本共産党の立場は、非常に注目されたものです。

私たちには、あの一九五〇年（昭和二十五年）の党の分裂という苦い教訓がありましたからね。なんとしても国際共産主義運動の決定的分裂だけはさけたいという考えでした。ですから、心をいためながらも、団結の維持のために力をつくそうときめました。

――日本共産党としては、どんな態度をとられたのですか。

八十一ヵ国の党の予備会議は草案づくりがおもなことでしたが、アメリカ帝国主義の侵略性の正しい見かた、各党の自主性を大切にするということで努力し、それは共同声明にもはいりました。わが

党は、アメリカに甘いフルシチョフの態度に賛成しませんでしたが、中国共産党などの世界の共産主義運動の分裂はさけられないという見解にも、賛成しませんでした。

わが党は一九六三年の第八回党大会七中総で、さらに具体的な態度を確立しました。私たちは、外国の党の大会などを利用して、特定の党への干渉や攻撃をすることは正しくない、また同時に、中ソの団結がかちとられなければはじまらないのだからと、すべてをがまんするというような自主的でない立場も正しくない。不当な攻撃をうけたら、反撃する権利があるという立場で、すでにはじまっていたソ連共産党からの原水爆禁止運動への干渉を見のがさないというものでした。

あのとき、こんな自主独立路線を確立していなかったら、あとでいろいろな盲従分子が出て、日本の党を中国派、ソ連派といったぐあいに二分してしまう危険さえありました。

複雑な国際共産主義運動におけるわが党の自主独立路線を明確にしたということが、その後のわが党にたいする干渉をおさえ、党の大部分を正しい方向に進めることができたのだと思います。

必ず高い段階に到達できる

——中国の四人組事件といい、チェコスロバキアの「77憲章」問題といい、社会主義国にもいろいろな問題がおきていますが、どうみたらいいのでしょうか。

たしかにさまざまな波乱や対立がありますが、永い人類の歴史からみれば、国際共産主義運動が生まれてから、まだ歴史は浅いし、いわんや社会主義国ができてからも、半世紀がすぎたぐらいです。

現在、世界には十四の社会主義国があり、その十二億の人口は、世界の人類の三分の一近くを占めているわけです。そこには独占資

本主義の支配と搾取はなく、医療は無料、家賃は収入の十分の一以下、年金や働く人の有給休暇は保障され、完全な男女同権という資本主義にはみられなかった新しい制度が生まれています。『共産党宣言』が書かれて以後の、この発展は、まさしく巨大であるわけです。

しかし、さっきものべたように、こうした社会主義国の建設は、まだはじまったばかりで、地球全体からみれば、社会主義が生まれ、育ちつつあるとき、つまり「生成期」といえるでしょう。

したがって、そこでは、いろいろな問題もおこるわけです。そのなかには、合理的でない、理解できないとみられることもあるわけです。

チェコスロバキアの「77憲章」の問題や、中国の「文化大革命」以後の事態で、党規約で毛沢東のあとつぎにきめられた林彪の問題、また四人組の文革当時の役割と今日の結末との関係などもそういう部類に入るでしょう。

一九六八年（昭和四十三年）の、ソ連はじめ五ヵ国軍隊のチェコスロバキア侵入にたいして、わが党は、それが社会主義の大義に反することがあまりにも明白な重大な国際事件だったので、長い論文を出してそのあやまりをきびしく批判しました。

しかし、社会主義国のこうした問題だけから、もともと社会主義というものはこういうものなんだという結論をくだすのは早すぎるんですね。歴史的にみれば、この期間というのは、まだ一瞬といっていいほどのものなんですから。

また、国際共産主義運動のなかでも、それぞれの国の発展段階のちがいをおたがいに確認し、それぞれの路線の自主性を尊重しあって、ともに協力しあうという流れが強まっていっているわけです。

わが党が、中ソの党から干渉をうけ、これを敢然とうけて立ったとき、まわりには、大きな党に小さな党がはむかうのは異端だとい



日本をおとずれたカリリョ書記長とともに（1976年3月、スペイン共産党代表団歓迎集会で）

うふうにみるむきがあったわけですが、こんにちからみれば、結論は明白でしょう。

わが党はこれまでも双方に意見のちがいがあっても、不当に他国の内部問題に干渉しないという原則を守れば、双方の友交関係は保てるという態度をとってきました。

しかし、日本の勤労者と国民に責任を負う党としては、社会主義国でおきるいろいろな問題について、わが党の意見をもとめられた場合、「ノー・コメント（なにもいえない）」だけでは無責任になるということもあるわけです。全体としては、それぞれの社会主義国が異なった歴史的条件から誕生しているという事実をも十分念頭において、発言することが大事でしょう。

こうしたとりくみのなかで、私はこれからの共産主義運動というものは、おそらくレーニンも予想しなかったような現在の混乱をのりこえて、高い段階、つまり多面性と自主性を容認しながら、本当の友好と連帯が生まれるといった高い段階に、かならず到達するにちがいないという、強い確信をもっています。

宮本顕治
私の歩みから

1977年5月5日
発行
日本共産党中央委員会出版局
東京都渋谷区千駄ヶ谷4―26―7
☎03―403―6111(代)
振替口座番号　東京2―21096
印刷
光陽印刷株式会社

定価100円